

<b>Title</b>	ポーア戦争における兵士像：表出する<異質なもの>
<b>Author</b>	田中, 孝信
<b>Citation</b>	人文研究. 60 卷, p.110-124.
<b>Issue Date</b>	2009-03
<b>ISSN</b>	0491-3329
<b>Type</b>	Departmental Bulletin Paper
<b>Textversion</b>	Publisher
<b>Publisher</b>	大阪市立大学大学院文学研究科
<b>Description</b>	山野正彦教授：中島廣子教授：ピエール・ラヴェル教授退任記念号

Placed on: Osaka City University Repository

## ボーア戦争における兵士像 —表出する〈異質なもの〉—

田 中 孝 信

イギリスの帝国主義的野心によって始まった第2次ボーア戦争（1899-1902）は、イギリス側の当初の予想に反して長期化の様相を呈する。政府は戦争を遂行するために世論を味方につけなければならなかった。それに大きく貢献したものの一つが「戦争もの」と呼ばれる大衆文学である。実際の軍隊が提供できない英雄と勝利の物語を大衆に期待されたそれらには、理想の兵士像や国家像が描き込まれる。本論では特に、これまであまり顧みられなかったドキュメンタリー・タッチの作品に焦点を当て、その主人公に据えられた「トミー・アトキンス」像を分析した。

結果として明らかになったのは、その像が孕む異質性だ。勇猛果敢で母国への忠誠心に溢れる陸軍兵卒は、将校への不満を通して社会の階級的緊張を示唆し、肉体的に退化し道徳的に墮落した現実のフリーガンと結びつく。軍隊はフリーガンを更生する役割を担う一方で、フェアプレーの精神というカモフラージュのもと、将校も兵卒もともにフリーガンと同じく残忍性を示す。既成事実化していたイギリス人とボーア人の優劣、軍隊内の秩序、文明と野蛮といったものの境界の流動化という問題が生じる。ボーア戦争は、それらの問題が今にも噴出せんとするイギリス史上初めての戦争だったのである。しかし、従来の言説に生じた亀裂は「健全な臣民」育成の大合唱によって覆い隠され、社会は「異質な要素」を孕んだまま、悲惨な第一次大戦へと突き進んで行くのである。

### はじめに—新聞、広告、「戦争もの」

1899年10月11日にボーア〔ブール〕側の宣戦布告によって始まった戦争は、イギリスの予想に反して長期化の様相を呈することになる。当初、イギリス国民は誰しも、戦争がクリスマスまでに終わるだろうと高をくくっていた。ところが、オランダ語ブールの原義が「百姓」という意味を持つことから、「百姓軍」と蔑んでいたボーア民兵＝コマンドを相手にイギリス軍は苦戦する。特に1899年12月中旬のナタール戦線における連戦連敗は、「<sup>ブラック・ウィーク</sup>暗黒週間」としてボーア戦争史に記録されている。ようやく1902年5月31日に講和の日を迎えるわけだが、1815年から1914年までに起こった戦争のうちで、これほどイギリスにとって屈辱的な戦争はなかったのである。

イギリス政府は、この帝国主義的野心に基づく戦争を遂行するために、世論を味方につけね



ばならなかった。それに大きく貢献したものの一つが新聞である。「マフェキングの祝典」に象徴される、国民一体となった愛国心の発揚は、帝国主義と結びついたマスメディアの為した業だった。戦争反対を唱える「ウェストミンスター・ガゼット」(*Westminster Gazette*)や「マンチェスター・ガーディアン」(*Manchester Guardian*)などごく一部を除いて、『タイムズ』(*The Times*)やニュー・ジャーナリズムの『デイリー・メール』(*Daily Mail*)といった大多数の高級紙や大衆紙が扇動した戦争推進の世論は、政府の植民地政策や戦争方針を大いに助けることになった。日刊新聞だけではない。週刊挿絵入り新聞もまた大きな役割を担った。1842年に『イラストレイティッド・ロンドン・ニューズ』(*Illustrated London News*)が創刊されて以来、主たる週刊挿絵入り新聞としては、1869年に『グラフィック』(*Graphic*)が、そして1891年に『ブラック・アンド・ホワイト』(*Black and White*)が創刊されただけだった。だが、戦争が商売になることを如実に物語るように、1900年1月27日に『スフィアー』(*Sphere*)が、その2日前には『スピアー』(*Spear*)が創刊される。また、絵ではなく写真のみを掲載した『キング』(*King*)も1900年1月5日に創刊された。これら6ペンスの週刊挿絵入り新聞は、多くの人々がイメージに飢えていた時代に、ボア戦争の現場のスケッチや写真、それにロンドン本社のお抱え画家が戦場の雰囲気や想像しながら描いた戦争画でもって、主たる読者であった中産階級の人々の飽くなき好奇心を満足させたのだった。そうすることで、陸軍省の失敗をしばしば批判しながらも、愛国心を鼓舞し、政府の戦争政策を支持する方向に人々を導いたのである。

企業は、ボア戦争への国民の関心の高まりを背景に、商品の販路を拡大するために戦争を利用した。結果として、商品広告もまた戦争遂行の機運を盛り上げることになる。商品と国家との友好関係を背景に、広告には商品の売上げを伸ばすために、兵士が頻繁に登場した。兵士によって使用される商品は、自ずと健全さや活力といった男らしさのイメージと結びつき、その商品を使えば、本国にいる誰でもが戦場の兵士と同じような望ましい性質を身につけることができるというわけである。例えば、キャドベリーがココアの広告で、自信に満ちた攻撃的でさえある男性のセクシュアリティを強調したり、元気旺盛な若いスポーツマンを用いたように、ドクター・ティブルズのヴァイ=ココア(Vi-cocoa)の広告は、その名前が喚起する活力(vitality)を兵士像に重ね合わせる〔図1・2・3〕。「ゴードン・ハイランド旅団兵とドクター・ティブルズのヴァイ=ココア、『彼はヴァイ=ココアを存分に楽しむ』」と題された広告には、周囲に振り注ぐ砲弾に何ら傷つくこともなく突撃するハイランド旅団兵が描かれ、エランドスラーフテの戦闘で負傷した軍曹に「力を培う」ヴァイ=ココアを送った市民の手紙が添えられている。さらに、ヴァイ=ココアは「栄養と活力が詰まったもの」であり、「より忍耐強くためめぬ努力でもって日々の競争と戦いに立ち向かおうとする全ての人」のために作られていると説明される。ヴァイ=ココアによって兵士は戦争の苦難を易々と潜り抜けることができる。同様に消費者も、ヴァイ=ココアを飲めば活力を得て、生活上の困難に耐え抜くことができるというわ

けである。兵士の世界と市民の世界が、勇猛果敢な兵士の姿を通して結びつくのである。事実、兵士像は、「絵の具からタバコに至る」<sup>1)</sup> あらゆるものの売上げを促進したのだった。

このような理想の兵士像がボア戦争の時期になぜ盛んに用いられたのかという点は、単に戦争という狭いコンテキストよりはむしろ 1890 年代というコンテキストのなかで捉えられねばならない。この時期、都市の無制限の拡大に伴う公衆衛生の問題に加えて、「新しい女」の登場とデカダンスが、大きな社会的・文化的不安として浮上する。こうした状況下で、兵士像は、強さ、健康、若さとますます結びつくようになる。ギッシング (George Gissing, 1857-1903) の小説『渦』(The Whirlpool, 1897) に描き込まれた都市の女性化現象のなかで、去勢されてゆく雄々しいヒュー・カーナビー (Hugh Carnaby) は、未開の地への憧れを抱く。異国の地で無骨なまでに揺るぎない男らしさを体現する兵士像には、ヒューが望むような征服者と冒険家のイメージが重ね合わされ、帝国への好戦的なまでの愛国主義を人々の胸に喚起するのである。兵士は、「女々しい」モダニズムが引き起こした家父長制の価値観の危機に対する解毒剤と信じられたのである。

広告に見られた理想の兵士像は、少年文学、教科書、「戦争もの」にも登場する。「暗黒週間」にイギリス軍が手痛い敗北を帰したとき、「出版社は、誰も戦争を扱った本以外読まないと不平を言った。大衆の気持ちを知る手がかりは、勝利がずいぶん長い間引き延ばされているという失望感だった」<sup>2)</sup> という反応が起こる。イギリス人の崇高さを再確認するはずの戦争が、逆にその脆弱さを世界に知らしめてしまったのである。国民は、軍隊が提供できない英雄と勝利の物語を「戦争もの」に期待した。作家や出版社は期待に応えて、南アフリカで戦う兵士の優秀さをさまざまなレトリックを駆使して伝えることで、歴史のなかに虚構の人物像を作り上げる。その意味で「戦争もの」は、政府の戦争遂行政策に寄与するとともに、国民が渴望した願望充足の手段でもあったのだ。

本論では、まず最初に、「戦争もの」のなかでもこれまでほとんど顧みられなかったドキュメンタリー・タッチの作品を取り上げてみたい。なぜならそこには、「戦争もの」に描かれた兵士像に共通する特徴がより直接的な形で提示されているからである。作品の分析を通して、どのような兵士像が提示されているか、その像が孕む問題点は何かを探ってゆく。そして、それを足がかりに、現実の兵士と軍隊との関係について考察し、その観点からボア戦争の帯びる意義を明らかにする。

## 1 ジェイムズ・ミルン『アトキンズの書簡』

ボア戦争の時期に書かれたドキュメンタリーのなかには、『ボア戦争のロマンス』(The Romance of the Boer War, 1901) のように新聞記事や逸話をもっぱら利用したものや、主人公に「トミー・アトキンズ」の愛称でもって呼ばれていた労働者階級出身の陸軍兵卒を据えて、

戦争や軍隊生活を記録したものがあつた。例えば、キャラム・ベグ(Callum Beg)の『銃後のトミー・アトキンズ』(*At Home with Tommy Atkins*, 1901)は、イギリス国内での兵士の生活を事細かに描き、その生活が兵士に戦場で必要な愛国心、忠誠心、勇気といった価値をどのようにして植えつけたかを述べている。それらはともに単なる記録にとどまらず、読者向けに戦争を作り上げる。

ジェイムズ・ミルン(James Milne, 1865-1951)の『アトキンズの手紙』(*The Epistles of Atkins*, 1902)もそうだ。これは、兵士たちが故国に宛てて実際に出した多くの手紙と、彼らの戦争体験を表わそうとする作者の介入とから成る。ミルンは自作を始めるに際して、「ここではイギリス兵卒が、現実に関心した軍務を語っている」<sup>3)</sup>、それゆえ本文に含まれているのは一人称の記録である、と述べている。しかし実際は、現実が潤色され、ミルン自身のメタファーが氾濫している。まず、出だしの一節が全体の調子を定める。

丘の上には常に明かりが灯っている。それは、モーゼル小銃やリー＝メトフォード銃が放つ怒りに満ちた閃光では隠すことのできない明かりなのである。我々はその輝きを兵卒の手紙のなかに見てゆく。それらは、南アフリカ戦争という新たな大きな戦いが起こったとき、感受性の強い兵卒によって書かれたものである。(7)

続く各章でメタファーは増殖し、アトキンズの勇気ある行為が強調される。彼は「若きオーク」(203)、「無骨なサムソン」(204)であり、神性まで帯びる。

「あごひげを蓄えた立派な戦士たちが、死をもろともせず、山を駆け上がって行く様を見ることは、平凡な日常生活の10年分にも値する。戦いの瞬間、これらの男たちは何か神にも似た存在となり、顔は鋼のごとく変化し、『運命』そのもののようですらある。」(50)

クリミア戦争で「セヴァストポリ要塞を眼前に壘壕のなかで頑張るイギリス軍勇士たちを模倣して」<sup>4)</sup>以降、あごひげは、イギリス社会ではいずれの階級を問わず男らしさの代名詞となった。それをつけた勇敢なイギリス兵士は、比喩的表現によって超絶した存在となり、神に変化する。

アトキンズの巧みな言葉遣いにも目を向ける必要がある。「アトキンズは生き生きとした文や洒落た語句を生み出す名人であり、爆発して文学的な榴散弾の破片となる」(17)し、「自分自身の言葉で植民地のあらゆるものを言い換えたい」(20)という願望を持っている。ある山には「スズめっきの銃とタマネギ」(21)という綽名がつけられ、ボーア人の弾丸はトランスヴァール共和国大統領クリューガー(Paul Kruger, 1825-1904; 在職 1883-1900)の名を取って「クリューガーの丸薬」(22)と呼ばれる。アトキンズの言語と価値観は明らかに皮肉なユーモア

によって形作られたものである。ミルンは、兵卒のこのようなユーモアは表面に浮かぶ「きれいな泡」に過ぎず、その下には「落胆の深淵」(168)が隠されていると見なす。皮肉と冗談によってアトキンズは、絶望と不安という、声に出すのが男らしくない、兵士らしくないものを隠すのである。

理想の兵士像を追うあまり一般市民との間に距離が生じないようにするために、また、海外での戦争と本国とのつながりを保持するためにミルンは、家庭こそが靈感の源であり、アトキンズが戦うのは家族のためなのだとたえず読者に主張する。

我々は次のような一節に出会う。「おまえのために、そして私たちのかわいい子のために、私はできるだけ気をつけるつもりだ。しかし、同時に女王陛下と国家のために自らの責務を果たすつもりでもいる。」家族の絆と国家への忠誠が一つとなる教理問答よりよきものがあるだろうか？ 二つはともに愛国心を表わす要素であり、兵士の家庭は国への表玄関なのである。(29)

家族愛と国への忠誠心を同等の価値を持ったものだと訴えているのである。家族を守ることは、国家の利益を守ることにつながるといふわけである。

ミルンは、「お母さん」という「愛しい言葉がしばしば傷ついた兵士の口に上る」(98)とき、そこに神聖さを読み取り、兵士が英雄的資質を備えているのみか「心優しい騎士」(174)の役割をも担っていることの証しとする。そして、兵士の心のなかで、戦場と家庭とをつなぐ中心的女性像が、女王である。彼女は、全ての兵士にとっての原型的な母親像として使われる。威厳を保ちつつ母として振る舞い、王権を守る彼らを皆、息子として抱くのである。ミルンは、彼女からのチョコレートの贈り物〔図4〕に対する兵士の反応を、次のように記している。

健康な兵士にとって、そのチョコレートは靈感を与えてくれるものだが、傷ついたり病に倒れた兵士にとっては、神聖なものである。言わば母なる女王陛下が彼のベッドを見舞ってくれたに等しく、そのお言葉は、家庭・愛・国家といった真と善を備えた大切なものとして耳に響く。(174)

もっともボーア側を支援するドイツの漫画にかかれれば、クリューガーから厳しく折檻される若きイギリス兵は、女王からチョコレートを与えられて宥められていることになり、現実のふがいなさを皮肉られる〔図5〕。

戦争と本国とのつながりは、アトキンズの道徳性を通して強調される。戦場での体験は、兵士たちの間に、互いの尊敬と共通の目的とによって結ばれた新たな人間関係を形成する。友情は敵にまで及ぶ。なぜなら戦う男たちは、「戦争という緋色の波のなかで、勝利のために

奮闘しているときでさえ、彼らを共通の兄弟愛のなかにしっかりと組み合わせる糸」(185)で結ばれているからである。アトキンズが敵に対して抱くこの友情は、自国のために懸命に戦う敵への尊敬の念といった戦場独特の道徳性から生じたものであり、その基盤は本国で作られたものだと思なされる。アトキンズの肉体的強さは、イギリス社会で生み出された、彼の「道徳的強さ」(85)によって洗練されたものとなる。勇気、義務、道徳性こそが、彼の行動の根本にあるのだ。

戦場での敵について、これほどまでに寛大に彼が言うことに耳を傾けよ。両親の足元に置き、彼らに息子を誇りに思わせることになる勲章について、彼が語ることに耳を傾けよ。彼が母国について、そして自らのより大きな責務について語ることに耳を傾けよ。さすれば、彼が進む方向を照らす明かりがどんなものであるか理解できるであろう。(23)



THE QUEEN'S GIFT TO HER PEOPLE IN SOUTH AFRICA. THE TIE OF COMRADESHIP—AFRICA 1900.

図4 *Illustrated London News* 23 Dec. 1899: 899.



図5 From David Smurthwaite, *The Boer War: 1899-1902* (London: Hamlyn, 1999) 52.

イギリス人であることの誇り、これが彼のアイデンティティと彼の行動を規定する。彼は国にとって道徳的に名誉であり、作品中の表現を使えば、まさに「軍服を着た賢人」(8)なのである。

## 2 軍隊が孕む不安定要素

しかし同時に我々は、『アトキンズの書簡』に描き込まれた不安定要素にも目を向けねばならない。確かにここでも、「戦争もの」に特徴的なパブリック・スクール倫理が、フェアプレーの精神の尊重という形でアトキンズに付与されている。彼は昔ながらの銃剣を用いた戦いを好む。だが、この戦争が敵の姿すら見えない「現代戦」(128)であることにも気づいている。特に「暗黒週間」に起こったスピオン・コブの戦いを、ある騎兵は「屠殺場以上だ」(137)と歩兵に語るが、それに続けてミルンは以下のように述べる。

その言葉が発せられるやいなや、砲弾が語り手のそばにドシンと落ちて、彼の頭は吹き飛んだ。捻じ曲がった体は人間のものとは思えなかった。その光景だけでも、スピオン・コブを赤く染まったものとして、歩兵が残りの人生ずっと記憶にとどめるのに十分だった。たくさんの恐怖を与えられても、我々は忘れるかもしれない。しかし、我々自身が悲劇に巻き込まれた場合、我々の魂に付着した染料が色あせることはない。(137)

これは、挿絵入り新聞がスピオン・コブの戦いを朝食の席に相応しいような矮小化したイメージにして提供したのに対して、ウィンストン・チャーチル(Winston Churchill, 1874-1965)が現実を正確に「砲弾に打ち砕かれ、身体がばらばらになった死傷者が頂上には散らばり、血なまぐさい吐き気を催すような混乱状態を呈していた」<sup>5)</sup>と描き出しているのに近い。ミルンは、戦争の早期終結を祈る兵士の手紙を導入しつつ、戦争の悲惨さを読者に訴えるのである。

それは、こうした事態を招いた将校に対する兵卒の不信感として表現されてくる。数の上で圧倒的に少ない敵を前に退却を繰り返す将校たちの資質不足という事実を無視することはできない。W・E・ケアンズ(William Elliott Cairnes, 1862-1906)のような改革論者には、将校の数が多過ぎ、軍隊は「富裕層が余暇を過ごすための優雅な職業を提供するだけの組織」<sup>6)</sup>になってしまっていると思えた。そうした批判を反映して、『アトキンズの書簡』には将校批判が描き込まれるのである。将校に対する忠誠心が強調される一方で、ある兵卒は、将校たちを「全員、名誉が欲しくてたまらない輩」(20)と呼び、別の兵士は、大佐の「君たち自身のために、決して消えることのない名声」を確立せよという演説を、「代価は、実に、とてつもなく高くつく」(144)と皮肉る。ロンドンの下町出身の兵士が、「さあ始めようぜ。やられりゃ、勲章の一つでも、それか、聖ジョージ救貧院の許可証か、どっちかもらえるだろうよ」(130)と言うとき、英雄神話そのものに対する幻滅すら窺える。熱狂的なまでの愛国心、感傷主義、素朴なキリス

ト教信仰といった要素を帯び、その道徳性と肉体的強靱さが強調された、国家の危機に際して女王陛下に忠実な、理想の兵士像が提唱される反面、社会の階級的緊張や反目が示唆されているのである。

### 3 フーリガンの恐怖

軍隊が、アングロ・サクソン民族の男らしさの象徴となるべき潜在的なアトキンズたちを、理想像を根底から破壊するフーリガンの温床たる労働者階級に依存していることを考えれば、そうした緊張や反目は一挙に現実味を帯びる。この道徳的に墮落し肉体的に退化した若者たちの存在は、大英帝国の将来にとって決して縁起のよいものではなかった。ロバート・ブキャナン (Robert Buchanan, 1841-1901) は、1899年12月に『現代評論』(*Contemporary Review*) に掲載された「フーリガンの声」のなかで、「トミー・アトキンズ」を帝国の威厳を貶める「フーリガン」だと真っ向から批判し、アトキンズを賛美するキプリング (Rudyard Kipling, 1865-1936) の『兵舎のバラッド』(*Barrack Room Ballads*, 1892) を「言わば完全な野蛮状態へと向かう大きな逆波」<sup>7)</sup>の一部だと厳しく弾劾した。まさにフーリガンは、混沌をもたらす内なる「外国人」だったのである。

特にフーリガンが徒党を組んだ場合、彼らに対する外部の人間の恐怖はいや増す。彼らは、『タイムズ』が述べるように、「あまりに大人数で行動するため、一人の警官では対処できない」<sup>8)</sup> かった。彼らを記述するのに軍隊のイメージが用いられ、組織化された戦闘集団として提示される。ウォルター・ビザント (Walter Besant, 1836-1901) は『イースト・ロンドン』(*East London*, 1901) のなかで、ケーブル街の少年たちを「小さな連隊」<sup>9)</sup>と呼ぶ。各ギャング集団は、「ベルベット帽ギャング」とか「ディック・ターピン・ギャング」といったふうに自ら命名し、自分たちのアイデンティティを確立した。<sup>10)</sup> これは、兵士たちが自分たちの属する部隊に誇りを持つのと似ている。権威、特に警察に不信任を抱き反抗するフーリガンたちは、縄張りに執着し、そこに入るものには誰であろうとも襲いかかった。

少年たちは集まって通りを占拠する。もし誰かがそこを通り抜けようとでもしようものなら、彼らはその人物に襲いかかり、殴り倒し、頭をさんざん蹴り、盗みを働く……少年たちは通りを占拠しているのが自慢なのだ。<sup>11)</sup>

また、クラレンス・ルック (Clarence Rook, 1862-1915) の『フーリガンの夜』(*The Hooligan Nights*, 1899) に描かれた敵への攻撃は、軍事的正確さでもって計画されているかのようである。<sup>12)</sup>

#### 4 更生施設としての軍隊

集団としてのフーリガンたちの行動を説明するために軍隊のイメージが用いられたのならば、彼らを更生させる手段として提唱されたのは正規の軍隊での生活だった。フーリガンの入隊が大英帝国の将来に暗雲を投げかけるものとして危惧された一方で、軍隊の帯びる道徳的価値が力説されたのである。頻繁に軍事問題について『ブラックウッズ』(*Blackwood's Magazine*)に寄稿していたヘンリー・ノウルズ(Henry Knollys)大佐は、1896年2月の「イギリス士官と兵士—将来の姿」という記事のなかで、飲酒等の個人的問題への軍隊の管理がより高い道徳性を備えた兵士を作り出すと主張する。

イギリスの兵士は応召されると、それまでの生活様式や思考習慣とはまったく異なる高尚な世界に、突然引き上げられる。彼は以前のように日々の糧をどうして得ようかとさもしい心配事に煩わされることもなく、病気、不正、市民社会での職業が帯びる不安定ゆえの不安感からも解放される。軍隊には、でたらめな無秩序の代わりに、組織立った規則性があるのだ。衣服や態度には自尊心がみなぎり、この素晴らしい世界を旅することで、知性も磨かれるのである。<sup>13)</sup>

新兵は、軍隊に全面的に面倒を見てもらうことで、道徳的に高められる。自由はなくなるが、それすら肯定的に捉えられる。なぜなら社会生活を営んでいたとき、自由は彼に失敗をもたらしたただけだったからである。軍隊こそは、良き市民性の模範として重要な役割を担う、一つの完璧な「社会」なのである。そこで躰けられ、自律できる人間に生まれ変わった後、役に立つ市民として社会に送り返されることになる。

ボディービルの専門家ユージーン・サンドー(Eugen Sandow, 1867-1925)もまた、貧困と社会問題との相関関係や、その改善策としての軍隊の効用をはっきりと認識していた。彼はフーリガンを「誤った方向に勇気を出してしまった単なる犠牲者に過ぎない」と判断し、「飢えて、精神的糧もほとんどなく、……何らの道徳的制御も働くことのない原始的野蛮さゆえに、彼は力づくで欲しい物を手に入れようとする」と主張した。サンドーによれば、軍事教練がフーリガンを「本当の理想の兵士に、少なからず英雄に、……最高の開拓者や植民者」<sup>14)</sup>に変えるのである。

いやそれどころか、批評家のなかには、フーリガンにはもともと「理想の兵士」になるための素質が備わっていると主張する者もいた。フーリガンの縄張り意識、戦闘能力、頑固さは、まさに帝国を守る者に要求される性質なのである。確かにこうした性質は秩序の破壊につながるものだったが、戦争という非日常体験においては、同時に英雄的資質ともなり、フーリガンを帝国の神話の一部に押し上げたのである。この考えに従えば、フーリガニズムは単に、「タ

イムズ」の言葉を使えば、「高尚な精神の捌け口」<sup>15)</sup>を必要としている抑圧されたエネルギーの徴候に過ぎない。フーリガンは社会ののけ者などでは決してなく、兵士の卵と言える存在なのである。

## 5 フーリガンと軍隊の類似性

しかし、フーリガンの性質を軍隊に必須のものに見なすことは、軍隊がその肯定的価値とは裏腹に野蛮性を帯びていることを認めてしまうことになる。ノウルズは、「自律できる人間」への変化を助ける軍隊の要素の一つとして、パブリック・スクールで称揚された、スポーツ競技の「チーム精神」を挙げた。兵士は、軍隊という勝利の責務を負ったチームの一員であり、戦うスポーツマンなのである。道徳的勇敢さを得る最善の方法は、実際の戦いという競技の場で肉体的勇敢さを身につけることなのだ。道徳問題はスポーツのイメージに置き換えられ、「戦争もの」では、ボーア側のゲリラ戦術はフェアプレーの精神に反するものとして非難された。だが、こうした姿勢は、現実の戦争の残忍性を、役割演技の安全な世界に移し変えることによって隠蔽しているに過ぎない。実際、イギリス兵自身のフェアプレーの精神も見せかけに過ぎなかった。ミルンは、戦争では「畜生と天使が同居し得る」(91)と述べるに際して、ある兵士の「ああ、素晴らしかったじゃないか！ 本当に！ 僕の銃剣は赤く染まったんだ！ これまでで最高に楽しいことだった」(90)という戦場での殺戮に享乐的な快感を覚える声を引用している。ミルン自身、アトキンズを英雄として描き出す一方で、ブキャナンが批判したようなアトキンズの野蛮性に気づいていたことが窺える。またC・F・G・マスターマン(Charles Frederick Gurney Masterman, 1874-1927)は、「『フェアプレー』の本能を、ロンドンの通りでの戦場で自然に獲得するのは不可能だ。拳固と歯であつという間に始まった戦いは、南アフリカの戦争のように、博愛主義に基づいて手加減しようなんて気持ちを吹き飛ばしてしまう」<sup>16)</sup>と述べて、フーリガンの喧嘩っ早さとボーア戦争の根底にある好戦性とのつながりを示唆する。

このような残忍さは、兵卒のみならず将校にも共通して見られるものである。それを鋭く見抜いたJ・A・ホブスン(John Atkinson Hobson, 1858-1940)は、『帝国主義——一つの研究』(*Imperialism: A Study*, 1902)のなかで、ベイデン＝ポウエル(Robert Baden-Powell, 1857-1941)の「フットボールは面白いゲームだ。しかしそれ以上に、いやどんなゲームよりも面白いのが、人間狩りというゲームだ」<sup>17)</sup>という発言を批判的に引用している。戦争反対を唱える、イギリス最初のマルクス主義団体、社会民主連盟の機関紙『正義』(*Justice*)は、軍隊は、「海賊と追剥の倫理」に基づく、イートン校出身者の階層組織に由来すると述べている。将校はフーリガンの倫理を持った悪党一味のリーダーであり、名誉という慣例化したコードによって守られているに過ぎないというのである。『正義』は、『タイムズ』に載った将校の手紙

を引用する。

敵を駆逐した後、我々の騎兵大隊の一つ（私ではないが）は、その後を追い、たそがれ時には敵のなかに切り込んだ。そしてもっとも見事なイノシシ狩りが約 10 分間続いたのだ。収穫は 60 ほどになった。我々のうちの一人は、二人のボア人が一頭の馬に乗って逃げるのを目にしたので、槍で二人まとめて突き、一撃で両方をやっつけたのだった。もし暗くなってこなかったなら、もっと多くの敵を殺すことができただろう。<sup>187</sup>

フリーガンの対極に位置すると思われていた将校が、フリーガンと本質的に同じだということになる。「正義」はフリーガンのイメージを労働者階級から切り離し、それを支配階級に置き換えようとしたわけだが、結果として、軍隊全体がフリーガンの特質を帯びている可能性が出てくることになる。

### むすび—揺らぐ境界

『アトキンズの書簡』のようなドキュメンタリー・タッチの作品に具現された、勇猛果敢で母国への忠誠心に溢れる「トミー・アトキンズ」像を通して、国民は戦争遂行へと扇動された。しかし、その像も国家にとって危険な転覆エネルギーを孕む。戦争は、当初の予想に反してボア人の頑強な抵抗に直面して長期化する。国民の熱狂的支持と自治領からの増援軍派遣を受けてようやくイギリス側の優位が確定する。だがボア側は、ゲリラ戦に転換して執拗に抵抗を続ける。19 世紀、貧弱な武器しか持たない異人種に対する植民地戦争に次々と勝利した帝国主義国家は、9 分の 1 の規模の、それも退化論者が「先祖返りしたヨーロッパ民族」と主張する白人軍を打ち負かすのに約 3 年を要したのだ。それまで、中産階級がイギリス軍の優越性に不安を抱いたとしても、その不安は、ステレオタイプの英雄、通常は將軍の、軍事能力というよりはむしろ、誇張された勇気や武勇伝から成る公的イメージによって静められてきた。しかし、この方法も、名誉ある死よりもヒットエンドラン戦法を好む、組織化された完全武装のゲリラ相手ではそう簡単には効果を発揮しなくなる。それもボア兵は純粋な意味で兵士ではなく民兵であり、市民と兵士のアイデンティティは曖昧となる。圧倒的な軍事力によってすばやく勝利するというイギリス側のシナリオが崩れたとき、もし訓練を受けた兵士が市民を打ち負かすことができないのなら、軍隊の存在意義自体が問われかねない。ボア戦争は、トマス・バカナムが「19 世紀の軍隊が 20 世紀の戦争を戦わねばならなかった」<sup>191</sup> と言うところの新しい種類の戦争なのである。そうした新しい事態を反映して、戦争の悲惨さや無能な将校に対する兵卒の不満が『アトキンズの書簡』に描き込まれるのである。

その不満は、現実の兵士が、肉体的に退化し道徳的に墮落したフリーガン像と結びつくとき、

社会への脅威となり、大英帝国の将来に暗い影を投げかける。

フーリガンを更生する機能を持つものとして称賛された軍隊もまた、フェアプレーの精神というカモフラージュのもと、将校も兵卒もともに、フーリガンと同じく野蛮性を示す。焦土作戦や強制収容所は、ヨーロッパ各国から人道に反するものとして非難される。特に、史上初めて登場した強制収容所は、20世紀において、ナチスの戦争やヴェトナム戦争など数多くの戦争犯罪の舞台となる。「文明化の使命」を担ったイギリス人自身が、内に「野蛮人」を併せ持っていることが明らかになるのである。「最後のジェントルマンの戦争」<sup>20)</sup>と言われながらも実際は、イギリスは、ボーア人のゲリラ戦術を前にして、「ジェントルマンの戦争」を捨てなければならない羽目に追い込まれていたのだ。もはや、劣等と見なしていたボーア人や黒人と、イギリス人との間に差異はなくなる。

以上述べてきたことから分かるように、既成事実化されていたイギリス人とボーア人との優劣、軍隊内の秩序、軍人と一般市民、文明と野蛮といったものの境界の流動化という問題が生じる。ボーア戦争は、それらの問題が今にも噴出せんとするイギリス史上初めての戦争だったのである。

しかし、従来の概念や言説に生じた亀裂は、ミルンが描く屈強な兵士像とは似ても似つかぬ虚弱な志願兵が引き起こした「国民の退化」問題への反動によって覆い隠される。国民は一丸となって健全な肉体を礼賛するのである。サンドーが、「もっとも考慮すべき事柄、すなわち愛国心のために身体を鍛錬するように訴えることが緊急の義務」<sup>21)</sup>と述べているように、健全なる「帝国臣民」<sup>インペリアル・サブジェクト</sup>の育成が、社会政策上の緊急課題となったのだ。

そして、健全な肉体礼賛は、「健全な野蛮性」<sup>22)</sup>と結びつく。それを発揮することこそが、「克己」「強靭さ」「忍耐力」といったネオ・スパルタ的な要素から成るヴィクトリア朝後期の「男らしさ」の証しであり、「イギリス人をしっかりさせる唯一の方法」、<sup>23)</sup> 腐敗からイギリス人を守る合法的な捌け口なのである。『渦』の結末部分でギッシングは、閑居し一人読書に没頭するのでもなく、また「狂暴なまでの残虐さ」<sup>24)</sup>に陥るのでもない、より均衡の取れた穏健な男性性が将来実現するだろうとはほとんど期待していない。ボーア戦争での苦い経験は、反帝国主義者ギッシングの予想をますます確実なものにする。確かにこの戦争によって軍隊の近代化、国民の体力強化の動きは加速した。しかし、「狂暴なまでの残虐さ」を「健全な野蛮性」とすり替え美化する社会は、ミルンのアトキンズ像が孕む「畜生」の部分を増大させてゆく。そして社会は、そうした動きを笑ったり皮肉ったりするユーモアのセンスをまるでなくしてしまったかのように、さまざまな「異質な要素」を孕んだまま、第一次大戦の大量殺戮へと突き進んで行くのである。

## 【付記】

本稿は、日本ヴィクトリア朝文化研究学会第6回大会（2006年11月18日、於 神戸女学院大学）における口頭発表に加筆・修正を施したものである。

## 【註】

- 1) Lori Anne Loeb, *Consuming Angels: Advertising and Victorian Women* (Oxford: Oxford UP, 1994) 7.
- 2) Thomas Pakenham, *The Boer War* (1979; London: Abacus, 2000) 247.
- 3) James Milne, *The Epistles of Atkins* (London: Dent, 1902) 1. 以後このテキストからの引用の場合は、引用文の後に括弧に入れて頁数を記す。
- 4) G. M. Trevelyan, *English Social History: A Survey of Six Centuries. Chaucer to Queen Victoria* (1944; Harmondsworth: Penguin, 1967) 562.
- 5) *Sphere* 3 March 1900: 184, quoting from Churchill's letters in the *Morning Post*. チャーチルの生き生きとした描写は、彼の「少年のように率直な熱情」によるものだった。対照的に、それに添えられた、ブレイター (Ernest Prater) のスケッチに基づいて描かれた担架を運ぶ人々の絵は、非常に抑制されている。
- 6) W. E. Cairnes, *The Absent-Minded War* (London: Milne, 1900) 146.
- 7) Robert Buchanan, "The Voice of 'the Hooligan.'" *Contemporary Review* 76 (Dec. 1899): 774.
- 8) *The Times* 4 Dec. 1900: 7.
- 9) Walter Besant, *East London* (London: Chatto & Windus, 1901) 176.
- 10) Geoffrey Pearson, *Hooligan: A History of Respectable Fears* (Basingstoke and London: Macmillan, 1983) 83.
- 11) Besant 177.
- 12) Clarence Rook, *Hooligan Nights* (1899; London: Oxford, 1979) 17.
- 13) Henry Knollys, "English Officers and Soldiers—as they will be," *Blackwoods* 159 (Feb. 1896): 210.
- 14) Eugen Sandow, *Sandow's Magazine of Physical Culture* Sept. 1906: 386.
- 15) *The Times* 6 Dec. 1900: 13.
- 16) C. F. G. Masterman, *From the Abyss* (London: R. Brimley Johnson, 1902) 68.
- 17) J. A. Hobson, *Imperialism: A Study* (1902; London: George Allen & Unwin, 1938) 214.
- 18) *Justice* 17 Mar. 1900: 1.
- 19) Pakenham xvii.
- 20) See J. F. C. Fuller, *The Last of the Gentlemen's Wars: A Subaltern's Journal of the War in South Africa 1899-1902* (London: Faber, 1937).
- 21) Sandow, "A Nation's Call for Men," *Sandow's Magazine* Mar. 1900: 195.
- 22) George Gissing, *The Whirlpool* (London: Everyman, 1997) 19.
- 23) Gissing 19.
- 24) Gissing 415.

【2008年9月22日受付、10月28日受理】

# The Image of the Common Soldier in the Boer War: The Eruption of the Heterogeneous

TANAKA Takanobu

The Second Boer War (1899-1902) caused by British imperialistic ambition began to assume an aspect of a prolonged war, contrary to her initial expectations. The government had to win public opinion to its side in order to carry out the war. One of those which largely contributed to that end was the "war books." The public hungered for the stories of heroic soldiers and glorious victories in Boer War literature because the real army could not give them what they wanted it to be and to do. Therefore an essentially imaginary version of the war was delineated in the works. In this paper, I focus on one of the documentary accounts of the war which have received little attention, *The Epistles of Atkins* (1902) by James Milne, and analyze the image of "Tommy Atkins" which embodies a popular myth of the common soldier.

As a result, it becomes clear that Atkins contains the heterogeneous. His protean energies sometimes hint at subversion. Whereas he is undaunted and loyal to the Queen, he suggests a tension between classes through his complaints against officers and connects himself with the physically and mentally degenerated hooligans. While the real army takes a role of rehabilitating them, not only soldiers but officers show the same brutality as hooligans under the camouflage of the spirit of fair play. The established boundaries such as between the British and the Boers, officers and soldiers, and civilization and savagery become fluidized. The Boer War was the first war in British history in which such fluidization was revealed. But those rifts in conventional concepts and discourses were concealed amid a chorus of advocacy of the development of wholesome and healthy "imperial subjects," and people charged ahead to the disastrous First World War.